

旅行者と服装

十九世紀前半のオリエント旅行記に見る アイデンティティの問題に関する一考察

畑 浩一郎

序

十九世紀前半にフランスおよび西洋諸国で高まったオリエントブームは、東方の国々への旅行を急速に大衆化した。それまでこれらの国々を訪問する西洋人は、事実上、外交官や学者、医者といった専門職に携わる人々に限られていたのだが、これ以降、純粹に好奇心に駆られた一般の旅行者が、次々とギリシア、トルコ、エジプトを目指して旅立っていくのである¹。これらのより大衆的な旅行者にとって、西洋とは全く異なるアジアの風習は、確かに興味深いものに見えたに違いない。実際オリエントの人々は、西洋人から見ればしばしば突飛とも思えるような習慣を持っており、ヨーロッパの風習しか知らない新しい世代の旅行者にとって、現地人の暮らしぶりは時として新鮮な驚きを与えてくれたはずである。この点に関して、十八世紀末の哲学者ヴォルネーが面白い指摘をしている。彼によれば、ヨーロッパ人とオリエント人の生活習慣には驚くべきシンメトリーが見られるというのである。例えば、西洋人は頭髪を伸ばし髭を剃るが、オリエント人は髭を伸ばし頭は剃る。西洋人にとって帽子を取るのは敬意の印だが、東洋人にとってむき出しの頭は狂人の印である。西洋人は腰をかがめてお辞儀をするが、オリエント人は立ったまま挨拶をする。西洋人は立ったまま一日を過ごし食事の際は椅子に座るが、オリエント人は座ったまま一日を過ごし食事の際は床に座って食べる。言語に関しても、西洋人は左から右に書くのに対し、オリエント人は逆向きに書き、さらに西洋における男性名詞のほとんどがオリエントでは女性

¹ この時代にオスマン帝国を訪れる西洋人旅行者の質、量の変化に関しては、拙論文「Le Débarquement en Orient, Formalités de séjour et identité des voyageurs au Levant dans la première moitié du XIX^e siècle」『仏語仏文学研究』26号 2002年11月を参照。

名詞である等々²。十八世紀の旅行者とは異なり、新世代の旅行者は、こうしたオリエント人の習慣について前もって十分な知識を持っていたわけではなかった。それゆえ現地を目にする西洋との風習の違いは、彼らにとって尽きせぬ興味の源泉となり、快く彼らの異国趣味を満たしてくれたのである。

東方の国々を訪れる旅行者はしかしながら、こうした異文化の風俗の違いについて、常に観察者であっただけではない。時としてオリエントの風習は、外国人である西洋人旅行者をも巻き込んで、彼らに現地の習慣を考慮することを強いる場合があるのである。例えば人々の「服装」をめぐる問題がそれである。実際、旅行者であろうと現地人であろうと、外出する際には誰でも何らかの服を身につけなければならない。しかしオリエント社会では、服装に関してある特有の価値が与えられており、その価値を正確に理解しておかないと、外国人といえども、しばしば思いもかけない混乱に陥る場合があるのである。本稿ではこの「服装」というテーマをめぐる、オリエント社会において個人がどのように認識されるかという問題を、次の三つの観点から考察したい。まずオリエント社会における「服装」の意義に関する考察、次いでそのような社会を訪れた西洋人旅行者と「服装」の問題との関わりについて、そして最後にこれらの考察の総括として、ジェラルド・ド・ネルヴァルの『東方旅行記』のあるエピソードを分析することにする。

オリエント社会と服装

「服装」という指標

二十五年にわたるエジプトでの生活を元に執筆された貴重なオリエントの旅行ガイドである『エジプトとヌビアのタブロー』の著者ジャン＝ジャック・リフォーは、オリエント人の服装に関して興味深い指摘をしている。彼によれば、これらの人々の服装は、社会的階級や信仰する宗教によって明確に決まっており、被り物や履き物のちょっとした差異によって彼らはそれらの情報を外部に知らしめているのだという。

彼らにおいては、服装は社会的身分や宗教観に応じて変えられる。ある男を見

² Voir Volney, *Le Voyage en Syrie et en Égypte* (éd. originale, *Voyage en Syrie et en Égypte pendant les années 1783, 1784 et 1785*, Volland, Desenne, 1787), dans *Œuvres*, éd. par Anne Deney-Tunney et Henry Deney, t. III, Fayard, 1998, p. 593-594.

れば、そのターバンや靴の色によって、彼が奴隷であるのか主人であるのか、またキリスト教徒なのか、ユダヤ教徒なのか、イスラム教徒なのか分かる。例えば、ライヤ、すなわちイスラム教徒以外でパシヤに税金を払っている者たちは、青いターバンを巻いている。これらのライヤたちは、彼らの間の中でも、ターバンの巻き方や乗せ方によって、コプトの儀礼に属しているのか、ギリシアの儀礼に属しているのか、あるいはマロン派なのか、もしくはシリア、アルメニア、ユダヤといった他の教団の信者なのか識別されるのである³。

オリエントの社会ではこのように、服装は個人を識別するための重要な指標となっている。ターバンの色や巻き方ひとつをとっても、そこには様々な情報が込められており、この習慣を理解している人であれば、被り物を一瞥するだけで、それを身につけている人物について多くのことを瞬く間に知ることができるのである。さらにリフォーによれば、このような服装が提示する情報は「身分」や「宗教」に関するものだけではなく、さらに「職業」などにまで及ぶという。

イスラム教徒のターバンは白か赤である。このターバンのいくつかの相違によって、それを身につけている人の資格が判別される。というのもそこには、「軍人式」、「商人式」、「船乗り式」、「トルコ人式」、「アルパニア人式」、「アルノート人式」、「カーディ[裁判官]式」、「ムフティ[高位聖職者]式」、「デルヴィッシュ[托鉢僧]式」の巻き方があるのである⁴。

西洋人旅行者には、一見何気なく巻いてあるように見えるターバンだが、その巻き方には、実はこのように事細かな決まりがあるのである。オリエント人の衣服は、個人の地位・資格を明確に反映している。彼らはこうした服装の違いを重要な手がかりとして、お互いを判別しているのである。

このような服装にまつわるオリエント人の慣習について、リフォーは男性に関することしか言及していない。女性についてはしたがって別の検討が必要となるわけだが、実はオリエント人女性の服装にまつわる事情は、男性の時ほど単純ではない。結論から言えば、女性の服装にも、男性と同じように、様々な個人に関する情報が込められており、それを利用して彼女たちの所属する民族や宗教などを見分けることができる。しかしそれはあくまで、彼女たちが、夫以外の男性の目に触れない家の中にいる場合に限るのであり、西

³ Jean-Jacques Rifaud, *Tableau de l'Égypte et de la Nubie et des lieux circonvoisins ou Itinéraire à l'usage des voyageurs qui visitent ces contrées*, Treuttel et Würtz, 1830, p. 56-57.

⁴ *Ibid.*, p. 57.

洋人旅行者が町中で目にするような外出中のオリエント女性に関しては事情が異なるのである。実際、オリエントの女性は外出する際には、例外なく頭にヴェールを被り、体はゆったりとした外套で包んでしまうので、どの女性もお互いに似たような様相になってしまう。それゆえ外見から彼女たちの個人的特徴を見分けることはほぼ不可能となるのである。テオフィル・ゴーチエは、コンスタンチノーブルのトルコ人女性を前にしたときの印象を次のように記している。

最初のうち旅行者にとってフェレッジ[女性用の外出用外套]やヤクマック[女性の顔を覆うためのモスリンまたはガーゼの布地]は、オペラ座の仮面舞踏会のドミノのような効果を与える。最初そこからは何も判別できない。お互いに似通った外見をして、目の前をつむじ風のように通り過ぎるこれらの匿名の影を前にすると、一種の茫然自失に見舞われるのだ。誰一人として見分けることはできない⁵。

このように西洋人旅行者にとっては、当初どのオリエント人女性も全く同じようにしか見えない。その服装の単調さは、慣れていない旅行者にとって、ともすれば不安をかき立てるものでさえある。しかし一見どんなに似通って見えようとも、外出中の彼女たちの服装にも実は、男性の場合と同じように、個人を識別する手がかりが隠されているのである。マクシム・デュ・カンがコンスタンチノーブルのバブーシュ[東洋のスリッパ]市場で、その指標を発見している。

この豪華なスリッパは後宮の中でしか履かれることはない。外出の際は、女性はモロッコ皮でできた一種の短靴をつけ、さらにその上に革製の小さな長靴を履くのである。その色は宗教によって異なっている。靴の色は、トルコ人女性は黄色であり、アルメニア人女性は赤、ユダヤ人女性は黒である。この厳密な区別は男性の間にも認められる⁶。

ターバンや履き物によって社会的身分や宗教、さらには職業まで識別することができる男性の服装と比べた場合、確かに外出中の女性の服装には個人の資格・身分を示す手がかりは少ない。それでもデュ・カンが気づいたように、

⁵ Théophile Gautier, *Constantinople et autres textes sur la Turquie* (éd. originale, *Constantinople*, Michel Lévy, 1853), éd. par Sarga Moussa, La Boîte à documents, 1990, p. 159.

⁶ Maxime Du Camp, *Souvenirs et Paysages d'Orient, Smyrne, Ephèse, Magnésie, Constantinople*, Arthur Bertrand, 1848, p. 167-168.

オリент女性は自分の信仰にしたがって靴の色を変えており、その規則の厳密さによって、少なくとも彼女たちがどの宗教を信じているのかということは識別できるのである。

先ほど、オリент女性の服装も、男性の場合と同じくその個人の資格によって異なっているのだが、それを認めることができるのは彼女たちが家にいる場合だけであると書いた。実際オリентでは、夫の嫉妬深さによって、妻がよそ者に対して、その面立ちや家にいるときの豪華な服装を見せるなどということは原則としてあり得ない。したがって外国人であり異教徒でもある西洋人旅行者にとって、オリент人女性の細かな服装の相違を観察することはきわめて難しい。しかしある例外的な空間では、そのような貴重な体験が可能となる場合がある。ネルヴァルはカイロにおいて、この種の珍しい経験をしたと語っている。

このエジプトの大都市を散策中に、彼は偶然壁に貼ってある広告から、その夜、劇場でヴォードヴィルの公演があることを知ったという。久しぶりに母国の文化に触れてみるのも悪くないと考える彼は、早速テアトロ・デル・カイロという西洋式に建てられた劇場へと足を向けることにする。観客席に入り席についたネルヴァルは、ふと棧敷席へと目を向ける。すると、そこはレヴァント風の出で立ちをした現地の女性たちによって占められているのに気がつくのである。しかも驚くことに、彼女たちは公衆の前であるにもかかわらず、ヴェールを被っておらず、その独特の被り物をあらわにしているのである。こうした珍しい光景を前にして、ネルヴァルは被り物から彼女たちの所属する民族や宗教などを次々と識別していく。

ギリシアの女性は、金の縁飾りのある赤い布地でできたタクチコス[帽子]で見分けられた。彼女たちはそれを耳の上に傾げて被っているのだ。アルメニア女性は、肩掛けと、巨大な被り物にするために積み重ねている薄布でそれと知れる。既婚のユダヤ人女性は、ラビの掟によって髪を見せることができないため、その代わりに巻いた鶏の羽根を付けており、それはこめかみを飾りながら巻き毛のような感じになっている。これらの人種を区別するのは、被り物だけである。他の部分では服装はだいたい同じなのである⁷。

このようにオリент女性の被り物は、男性のターバンと同様、彼女たちが

⁷ Gérard de Nerval, *Voyage en Orient* (éd. originale, Charpentier, 1851), dans *Œuvres complètes*, éd. par Jean Guillaume et Claude Pichois, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. II, 1984, p. 328.

どのような人種や宗教に属しているのかを明確に示しているのである。しかし、ネルヴァルがここでおこなっている服装による出自の判別は、実は不完全なものでしかない点に注意しなければならない。なぜならこの判別には、エジプト人女性の大多数を占めるイスラム教徒が含まれていないからである。作家自身それは認めている。「いずれにせよ、一人としてヴェールを被っている女性はいなかった。ということは、一人として真にイスラム教徒の女性は上演に立ち会っていなかったということだ⁸。」結局のところ、ヴェールを外してその固有の被り物を人目にさらすなどという行為は、「劇場」という例外的な空間の雰囲気から生じてきたものでしかない。実際テアトロ・デル・カイロは、このオリエントの都市にあって、西洋の習慣が支配的な数少ない場所のひとつである。そこを訪れる人々は、そこに漂うヨーロッパの雰囲気に配慮して、その仕来りに従うために一時的に自分たちの習慣を中断しているに過ぎないのである。劇場という空間が、エジプト社会においていかに例外的であるかは、上演が終わると、棧敷席を埋めていた現地の女性たちが再び一斉にヴェールを被ることからもうかがえる。

劇場の出口では、あれほど豪華に着飾っていたこれらの女性たちは全て、再び黒いタフタ生地のできた単調なハップラー[通常は顔を覆うヴェールを指すが、ここでは外套の意]をまとい、顔立ちを白いボルゴ[ヴェール]で覆ってしまう。こうして善良なイスラム教徒女性然として、サイス[馬丁]がかざすたいまつ之光を受けながら、再びロバにまたがるのである⁹。

「劇場」という特殊な空間から一步外へ出ると、オリエントの女性たちは再び自らの習慣を取り戻し、彼女たちを見分ける貴重な手がかりである被り物を隠してしまう。こうして女性たちは、再びお互いに似通った姿に戻ってしまい、部外者には区別することが難しくなってしまうのである。

オリエント社会ではこのように、服装に対して、西洋にはない独特な意義が与えられている。オリエントの人々は被り物や履き物のわずかな差異によって、その所属する民族や信仰する宗教などに関する情報を、絶えず外部に向けて発しているのである。そしてその法則はきわめて規則正しく体系づけられているため、誰であれその仕組みを理解すれば、全く見知らぬ他人と出会っても、直ちにその人物についてかなりのことを知ることができるのであ

⁸ *Loc. cit.*

⁹ *Ibid.*, p. 329.

る。この時代に書かれたオリエント旅行記の多くに、バザール[市場]での人物描写が見受けられるのはおそらくこのような理由による。実際、多くの旅行記作家が、都市の中でも最も人が集まる場所であるバザールについて特別にページを割き、そこに集う様々な人々について、服装から人種、宗教、身分などを判別しながら紹介している。ここでは一例として、フランス政府お抱えの建築家であったマルシェベウスの例を挙げてみよう。『蒸気船によるパリからコンスタンチノーブルへの旅』の中で、彼はオスマン帝国の首都のバザールについて次のように述べている。

ここでは世界中のほとんどありとあらゆる民族、すなわち、ギリシア人、アルメニア人、フランク人、ワラキア人、アラブ人、アフリカの黒人たちが、各々の興味深い多種多様な服装を披露している。[...] 履き物によって容易に、ユダヤ人やアルメニア人からトルコ人を区別できる。アルメニア人は赤い深靴しか履かないし、ユダヤ人は赤褐色の深靴のみを履くのである。トルコ人だけが、黄色い靴を履く。またマホメットの子孫のみが、緑色のターバンや上着を着ることを許されている。一言で言えば、彼らは色の選択に大きな価値を与えているのである。[...] この色は軽蔑あるいは隷属のしるし、あの色は支配と優越の象徴といった具合である¹⁰。

たとえ現地の人々の習慣に詳しくない西洋人旅行者であっても、オリエント社会では、服装が個人の判別の手がかりとなっていることはすぐに察知できる。そしてその法則の規則正しさは、このような外国人に対しても、ちょっと観察を積むだけで、バザールに集う雑然とした群衆の中から直ちに、異なる民族や宗教に属する人々を見分けることを可能にしてくれるのである。

旅行者の服装

服装がもたらす混乱

服装が個人の識別のための重要な指標となっているオリエント社会にあつては、西洋人旅行者にとっても、どのような身なりをするかということは軽視できない問題となってくる。たとえ何も知らない外国人であろうとも、現地の人々は当然、服装によって旅行者の資格や身分を知ろうとするからであ

¹⁰ Marchebeus, *Voyage de Paris à Constantinople par bateau à vapeur*, Bertrand-Amiot-Marchebeus, 1839, p. 171.

る。したがって東方の国々では、どんな服を身につけるかという問題は、もはや西洋におけるように単なる個人の趣味の問題ではなくなる。服装を選ぶ際は、現地の風習をよく理解した上で最良のものを選択しなければならないのである。

実際オリエントにおいては、服装の問題は時として西洋人にとってきわめて重大な意味を持つことがある。この点でひとつ顕著な例を引いてみよう。実は十八世紀の初めにまさにこの問題をめぐって、レヴァントで活躍するフランス人商人とそれを取りまとめるフランス領事の間で大論争が起こっているのである。ことの発端は、1702年にトルコ政府がフランス領事に対して、管轄のフランス人が全て西洋の帽子か、あるいは「カルパス」と呼ばれるユダヤ人の山高帽を被るようにしてほしいと求めたことに始まる。それまでこれらの商人たちは「セス」と呼ばれる一種のターバンを巻いていたのだが、これでは外国人とオスマン帝国の臣民とが区別できないために、コンスタンチノーブル政府はこのような措置を求めてきたわけである。その要求に従い、同国人に被り物の変更を指導しようとしたフランス領事はしかし、商人たちの猛反発を受けることになる。商人たちがマルセイユ商工会議所に提出した陳述書によれば、カイロなどで西洋の帽子を被っていれば、絶えず現地の人々から不当な仕打ちを受けるであろうし、またカルパスにしても、これを被っているのは通常アルメニア人やギリシア人、ユダヤ人といった帝国内で隷属状態にある民族なので、カルパスを被れば、これらの民族がしのんでいる侮蔑に彼らもさらされるはめになるというのである。領事はフランス人の被り物の変更を徹底するために、当時の海洋大臣ポンシャルトランの命令を勝ち取るが、この命令はマルセイユ商工会議所の介入によって撤回されてしまう。しかもこの問題は、翌年再びスルタンが同じ要求を持ち出してきたために再燃する。今度はエジプトのフランス領事ブノワ・ド・マイエがコンスタンチノーブルのフランス大使を通じてトルコ政府への取りなしを頼み、結局、折衷案として次のような決定がなされることになる。すなわち今後もフランス人がセスを被ることは認めるものの、そのセスは赤い縞の入ったモスリン製でなければならないというのである。こうすることでフランス人も、明かな外国人として不当な差別を受けることもないし、かといって他の帝国臣民からも区別することができ、万事がうまくいくことになるわけである¹¹。

¹¹ Voir Robert Paris, *Histoire du commerce de Marseille*, t. V, (De 1660 à 1789, Le Levant), Chambre de Commerce de Marseille, sous la direction de Gaston Rambert, Plon, 1957, p. 270.

無論われわれの研究の対象である十九世紀の前半においては、オスマン帝国内における外国人差別は、かつてと比べてはるかに目立たないものになっているし、また西洋人の身分も前世紀とは比べものにならないほど上昇している。したがって旅行者が西洋の帽子を被っていたところで、十八世紀の商人が危惧したような不都合はまれにしか起こらないはずである。それでもやはり、東方の国々を訪れる旅行者にとって、服装は常に気を配らなくてはならない問題であり続ける。すでに考察したとおり、オリエントにおいては個人の認識はまず服装を通して行われるからである。逆に言えば、もし旅行者がこの問題に無頓着であると、しばしば思いもよらない誤解が生じることになる。この点でパレスチナのヤッファに上陸しようとするシャトーブリアン一行に起こったエピソードは典型的である。『パリからエルサレムへの旅程』の中で、作家はこのときの光景をユーモアたっぷりにこう語る。

岸辺にいたアラブ人たちが、我々を肩の上に乗せて運ぶために、腰まで水に浸かりながら近づいてきた。ここでかなり愉快な一幕が繰り広げられた。私の召使いが、白っぽい上着を着ていたのだ。白はアラブ人の間では身分の高い者の色であるため、彼らは私の召使いをシャイフ[長老]だと判断したのである。彼らは私の召使いを捕まえ、彼の抗弁にも関わらず、勝ち誇ったように運んでいくのだった。私はといえば、身につけていた青い衣服のおかげで、一人のぼろを着た乞食の背中に乗ってこっそりと逃げ出したのである¹²。

前に見たように、オリエント人は服装を、個人の身分や資格を知るための重要な手がかりとしている。彼らはこの習慣を、外国人であるシャトーブリアンたち一行にも適用したのだが、不幸にして旅行者たちはこの現地人の風習を十分考慮していなかった。両者の間に生じた誤解は結局のところ、オリエントにおける服装の特殊な意義について、作家たちが無頓着であったことから生じているのである。

ところで後に触れるように、旅行者はしばしばオリエントで現地人の衣装を身につけることがある。服装を変えて地元の人間になりすますことで、西洋の出で立ちをしていては望むことのできない利点を得ることができる場合があるからである。しかしそのような際には、とりわけ当地の服装に関する

¹² François-René de Chateaubriand, *Itinéraire de Paris à Jérusalem* (éd originale, *Itinéraire de Paris à Jérusalem, en allant par la Grèce, et revenant par l'Égypte, la Barbarie et l'Espagne*, Le Normant, 1811), dans *Œuvres romanesques et voyages*, éd. par Maurice Regard, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. II, 1969, p. 964.

習慣に注意を払う必要がある。オリエント社会では、服装と個人の身分・資格は厳密に対応しており、したがって服装を取り換えることは、その人自身が他者からどう認識されるかということをも変えることになるからである。したがって現地の服装を身につける旅行者は、自分の身分・資格が服装とともに入れ替わっていることを、常に念頭に置いておかなければならない。エジプトを旅行中のデュ・カンの場合は例えば、移動の際の快適さから、「ニザーム様式」と呼ばれる改革トルコ人の服装を身につける。これはゲートルやベルト、上着といった西洋風の衣装に、たっぷりとした東洋風のズボンを組み合わせたものであり、当時西洋化改革を進めていたオスマン帝国の官吏や軍人が主に着用していた服装である。このような衣装を着込んだデュ・カンはしたがって、当然周りの人からトルコ人として認識されるはずである。実際コセイールという紅海沿岸の村で、彼はこの種の勘違いをされる。

カフェで煙草を吹かしていたアラブ人たちは、私の姿を認めると、直ちに恭しく一列に整列し、私が前を通るとき挨拶をした。おそらく服装から、私をトルコ人だと間違えたのだ¹³。

このような状況で、もし旅行者が自分の身分の変更を考慮しないまま、西洋人として振る舞ったら、彼をトルコ人と疑わないこれらのアラブ人の間には大きな混乱が生じるはずである。しかも彼らはこの外国人を自分たちの支配者と考えて敬意を示しているわけだから、騙されたと分かれば憤慨するのは間違いない。そこから生じる不愉快な目に遭いたくなければ、旅行者は常に自分が変装しているトルコ人として振る舞い続けるしかないのである。

服装の選択

オリエントを訪れる西洋人旅行者にとって、どんな衣装を身につけるかということは熟考を要する問題となる。ここではもはや西洋におけるように、自分の趣味や快適さだけを基準に衣服を選ぶわけにはいかず、オリエント社会の服装にまつわる独自の習慣を常に考慮しなければならないのである。それでは具体的に旅行者は、どのような服装をすべきなのであろうか。西洋人がしばしばとまどいを感じるであろうこの問題に関して、先ほどの『エジブ

¹³ Maxime Du Camp, *Le Nil, Un voyageur en Égypte vers 1850* (éd. originale, *Le Nil (Égypte et Nubie)*, impr. de Pillet fils aîné, 1854), éd. par Michel Dewachter et Daniel Oster, Sand/Conti, 1987, p. 209.

トとヌビアのタブロー』の著者リフォーが詳細な忠告を与えている。彼によれば、パリやロンドンのどんな最新デザインの服にまして旅行者にふさわしいのは、現地人の衣装であるという。オリエント人の衣装をまとうことで、西洋人であることがより目立たなくなり、したがって商人から法外な値段で物を売りつけられることもないし、また砂漠など人気の少ない場所で盗賊などの真の危険にさらされることもなくなるというのである。このような現地人への変装の是非はひとまず置くとして、我々にとってここで興味深いのは、リフォーの服装に関する忠告が、全体としてある一定のオリエント人の身分を表すよう配慮されているという点である。例えば彼は、町中において旅行者が通常取るべき服装について、次のように説明している。

フランク人[東方諸国における西洋人の総称]は赤いターバン、ないしは白いターバンを、軍人風または商人風に巻くことが許されている。さらにイスラム教徒のように、黄色または赤の上着やバブーシュを身につけても良い。七、八百ピアストルぐらいを払って、トルコ人の簡素だがきちんと調和した服装を手に入れることになる。大切なのは、服装の様々な箇所できちんと釣り合いがとれていることである。一方で軍人に見えていながら、他方で商人のようであってはならない。そのために最善なのは、突飛な服装や独自の利便さを求めた服装を選ぶよりも、適正なことを遵守することである¹⁴。

リフォーはこのように、それぞれの服飾品の色や身につけ方まで細かく指示を与えている。そしてこれらの指示は、具体的なあるオリエント人の身分を忠実に再現することを目的にしている点に着目しよう。現地人の服装をするといっても、旅行者はただ雰囲気だけ「東洋風な」身なりをすればよいのではない。リフォーの言に従えば、服装によって、「軍人」や「商人」といった一定の職業、あるいは「イスラム教徒」や「トルコ人」といった社会グループを明確に示すよう配慮することが肝要となるというのである。

リフォーはさらに続けて、砂漠の横断など、大がかりな移動をする際の西洋人旅行者の服装に関しても忠告を与えている。原則となるのはここでも同じである。すなわち旅行者はその服装によってちぐはぐな印象を与えてはならず、必ずオリエント社会に見られるある特定の集団の構成員と同じ服装をしなければならないというのである。そしてそのためには、武器やパイプといった小道具に関しても注意を払わなければならない。

¹⁴ Rifaud, *op. cit.*, p. 57.

馬に乗る人にとって、マムルーク風の服装は、純粋なトルコ人の服装よりも優美でありまた便利でもある。フランク人がこの服装を選択しても、何の支障もない。また各人が好みの武器を携帯することも許されている。しかしながらトルコ人の間では、旅行中以外は一本の長剣のみを身につけることが習慣となっている。旅行中は長剣の他に、さらに何挺かの拳銃やカンジャール（短剣）を加える。パイプはトルコ風の服装に必須の小物である。しかしベドウィン風に着るときは、パイプは持たない。ちなみに砂漠に足を踏み入れるのなら、ベドウィン風の服装をすることが賢明である¹⁵。

リフォーのこうした事細かな忠告は、オリエント人の服装に関する独自の習慣を踏まえていることは言うまでもない。服装が個人を認識するための重要な指標となっているオリエント社会では、慣習にないちぐはぐな衣服はそれだけで、それを身につけている人の身分までも疑わしいものに見せる。したがってオリエント人に変装するのであれば、旅行者は、自分がどのような民族ないし身分に属しているのかということを、服装によってはっきり示しておくことが重要となってくるのである。

どのような服装をするかという問題が、個々の人種や宗教、社会的身分などによって決まってくるということは、逆に言えば、服装を変えることによって、人はある意味で、自分のアイデンティティをも変えることができるということである。たとえ現地に全くゆかりのない西洋人旅行者であっても、オリエント人の服装をすることによって、少なくとも言葉を話さない限りは、現地人として通すことも可能なのである。実際に何人かの大胆な旅行者は、このような手段によって、現地の人にしか立ち入りを許されない場所にまで潜り込もうとする。彼らは出で立ちを完全にオリエント人のものに変え、礼拝中のモスクやいくつかの都市の奴隸市といった、西洋人の格好をしていたのでは決して訪れることのできない場所を観察することに成功している。「現地人への変装」という行為はそれゆえ、この時代のオリエント旅行記にしばしば現れる、独特の興味深い主題となっている。こうした旅行者の「変装」にまつわる問題は、しかしまた別の機会に取り上げることとして、本稿では、当時オリエントを訪れる西洋人の大部分がそうであったように、旅行者が旅先でも西洋の服を着続けた場合の検討をおこなうことにしよう。

¹⁵ *Ibid.*, p 57-58.

西洋の服装が持つ二つの働き

言うまでもなく西洋の服装をしている旅行者は誰であれ、現地の人々から「西洋人」として認識されることになる。オリエントを訪れる西洋人の数は十九世紀に入ってから年々増加し、それにつれてこれらの外国人の姿も、以前ほど現地の人々の目にとって珍しいものではなくなっていく。したがって、自分たちのものとは全く異なる西洋の衣装を目にしても、オリエント人はもはや驚くこともない。彼ら自身の様々な服装がそうであるように、西洋の服装もただ「西洋人」を指し示すものとして理解されていくのである。ところでこの種の認識がおこなわれるオリエント社会においては、西洋の服装は、ヨーロッパでは見られないふたつの独自の働きを果たすことがある。そしてこれらの働きは全く相反するやり方で、旅行者の日常に無視できない影響を及ぼすことになる。ここでしばらくこの問題について検討をおこない、その考察を通じて、オリエント人に特有な個人の認識のメカニズムを探ってみることにしよう。

オリエントで西洋の服装が持つひとつめの働きは、旅行者の身を守る安全装置としてのものである。実際、多くの旅行者が、西洋の服装を着ていればオリエントでは危険は少ないと証言している。例えばシャトーブリアンは、我々が取り扱う旅行者たちの中でも最も早い時期にオリエントを訪れているのだが、すでにこの西洋の服装を着用することの有用性について触れている。ナポレオン軍のエジプト遠征が現地の風俗にもたらした変革を語るくだりで、作家は次のように述べている。

カイロの町には、フランス人が訪れた痕跡がなおも数多く残っている。女性たちは、外に出るのにかつてほど遠慮をしなくなっている。また人はどこにでも好きな場所に行くことができる。西洋の服装は、侮辱の対象であるどころか、保護されていることの証明である¹⁶。

ナポレオン軍とともに西洋の文化・慣習がエジプトへ到来し、現地の人々の伝統的な風習を大幅に変えた。これらの変革の中で、西洋人は敬意を持って眺められるようになり、したがって西洋の服装をしていればカイロでは安全に過ごせるというのである。シャトーブリアンはその旅行記の全編において極端な祖国愛を見せており、彼のフランス賞賛の言辞には注意を払わなければ

¹⁶ Chateaubriand, éd. cit., p. 1149.

ばならない。しかし少なくとも、西洋の服装をしていれば現地人の尊敬を受けるという点に関しては、彼の言っていることは正しく、他の旅行者たちも同様のことを報告している。例えばフロベールはナイル川遡上の旅をする際、安全面の配慮からあえてヨーロッパの服装を身につけたままにするとする。作家は母に宛てた手紙で次のように書いている。

ナイル川上では僕たちはエジプト人の服装を身につけることはないでしょう。ヨーロッパの服装のほうがより尊敬されるので、僕たちはそれを着るつもりです¹⁷。

フロベールと、同行のデュ・カンとは、旅行の雰囲気を盛り上げるため、アレクサンドリアやカイロで現地の衣装を買い込んでいた。しかしナイル川を下る際にはそれらを身につけることはなく、安全のため西洋の服装で通すというのである。最後に 1860 年に書かれたある雑誌記事の中で、ゴーチエが同じ考えを述べているということを指摘しておこう。かつての親友であり今はなきネルヴァルのオリент旅行記について触れたこの記事の中で、作家は自らが 1852 年におこなったコンスタンチノーブルへの旅行を思い起こしながら次のように語っている。

オリентではそれが安全であるとはいえ、このおぞましい現代人の服を着ていると、自分が大変惨めでみっともなく、また醜く思えるので、それをすぐに脱ぎ去ってしまいたい気分が駆られる。自分がこの輝かしい群衆の中のしみになっているようで、気詰まりに思えるのだ。まるで仮装舞踏会の中にフロックコートで現れたかのような¹⁸。

半世紀を隔てたシャトーブリアンとゴーチエのテキストの間で、西洋の服装が持つ価値がこのように逆転してしまっていることは興味深い。熱烈なカトリック信者の作家にとって、エジプト人を古い習慣から解放する近代文明の象徴であったヨーロッパの服装は、第二帝政の作家の下では、醜いブルジョアの刻印となってしまうのである。しかし我々にとって重要なのは、このよ

¹⁷ Lettre à sa mère, le Caire, 2 décembre 1849, Gustave Flaubert, *Correspondance*, éd. par Jean Bruneau, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. I (janvier 1830 à juin 1851), 1973, p. 543.

¹⁸ Gautier, « Voyage en Orient par Gérard de Nerval », *Revue nationale et étrangère*, le 25 décembre 1860, cité dans *Constantinople*, éd. cit., p. 368. この記事は 1870 年にネルヴァルの『東方旅行記』が再版された際に、その序文として再利用されることになる。

うな西洋の服装の価値の変遷よりもむしろ、十九世紀前半を通してこの服装が常に旅行者を守る安全装置であったという点である。西洋の服装を着てさえいれば、現地人から尊敬を受け、危険な目に遭うことはなかったのである。

このように西洋の服装が、旅行者を守る安全装置として働く理由として、この時代に顕著になる、西洋諸国のオスマン帝国に対する影響力の増大という歴史的事実を考慮しておかねばならない。スルタンの権力の弱体に乗じたヨーロッパ諸国のオリエントでの利権争い、いわゆる「東方問題」に関しては、もはやほとんど説明の必要はないであろう。インドへの道を確保しようとするイギリス、それを阻止したいフランス、絶えずボスフォラスを脅かすロシアなどが繰り広げる複雑な外交上の駆け引きは、結果としてますますトルコ政府の権威を失墜させ、西洋諸国の発言力を増大させることになる。他方で、ヨーロッパから絶えずこのようにつけねられる東方の国々も、西洋を模範に近代化を図ることで、弱体した国家を立て直そうという動きを見せる。オスマン帝国では 1839 年に始まるタンジマートがそれにあたり、また 1805 年以来、事実上トルコから独立していたエジプトでも、太守ムハンマド・アリーの下で西洋化改革がおこなわれる。こうした動きの中で、コンスタンチノーブルやカイロには、西洋から多数の技師や専門家が呼び寄せられ、彼らの指導の下で新しい技術やヨーロッパ式の家システムの普及がおこなわれていくのである。こうしてオリエントにおける西洋人の地位は、十九世紀の前半に大きく上昇することになる。

西洋の服装をしていればオリエントでは安全であるとされるのは、このような東方諸国における西洋人の地位の向上の問題と切り離して考えることはできない。西洋諸国はその強大な国力を背景に、次第にオリエントの国々を圧倒していく。それと同時に西洋人自身も、現地の人々から一目置かれるようになり、西洋人の身分を知らせる西洋の服装は、それだけでオリエント人の尊敬の対象となるのである。つまり旅行者は西洋の服装をすることによって、その母国の権威に守られることになるのである。ところでこのような現地人の認識には、ある種の抽象化の手続きが組み込まれていることに注意しよう。オリエントの人々は、西洋の服装を目にすると直ちに、それを着ている人に対して敬意を払うようになる。ところが彼らの敬意は決して、その服を着ている人そのものから生まれてきているわけではない。むしろそれは、このような服装をしている人が所属する国家の権威に由来しているのである。言い換えれば、現地の人々は旅行者の服装を通して、旅行者そのものを見ているのではなく、その服装が表象する国家を見ているのである。したがって

彼らにとっては、旅行者個人個人の具体的な違いはある意味でどうでもよいものになる。彼らにとって重要なのは、服装が表象するイメージであり、極端に言えば服装そのものなのである。こうして西洋の服を着た旅行者は、現地人の目には、ある種、匿名化された存在でしかなくなっていく。

西洋の服装が持つ特殊な働きのふたつめは、まさにこの点に生まれてくる。現地の人々の認識が、個人の資格ではなく、服装が想起させるある種のイメージによって決まってくるということは、旅行者は自分がどのように見られるかという点に関して、自分でコントロールできなくなることになる。確かに旅行者は、自分の母国に対して畏敬の念を抱いている人の前では、西洋の服装が表象する母国の威光を利用して、自分をも尊敬させることができる。しかしひとたび自分の属する国に対して悪感情を抱いている人の前に出れば、同じ西洋の服装が、今度は自分に災難をもたらすものとして働き始めるのである。そのような例をいくつか見てみよう。例えば、外交官であり、またシャトーブリアンの秘書をしていたこともあるマルセルス子爵は、パレスチナで次のような体験をしている。

私はヤッファのバザールを横切った。カフェは、町の近隣の兵営から抜け出してきたトルコ人やアラブ人の兵士たちで満員だった。私のヨーロッパの服装が、いくらかの威嚇の身振りや侮辱の言葉を引き起こしたが、私は理解できない振りをした¹⁹。

旅行者の服装はこのように、時として無条件にオリエント人の反感を呼び起こすことがある。マルセルスが遭遇した兵士たちにとって、西洋の服装はそれだけで異教徒の存在を意味するのであり、それを身につけている旅行者は直ちにある種の敵として認識されるのである。またスミルナの奴隷市では、アレクシス・ド・ヴァロンが同じように、彼が着ていた服装によって不運な目に遭っている。奴隷市で売られているオリエントの女性たちは、旅行者の服装を見るやいなや、突如としてヴァロンに嫌悪をむき出しにするのである。

我々のヨーロッパの服装を見ると、最初の陽気さは突然恐怖へと取って代わり、喜びの叫びは怒りの叫びとなった。アビシニア人女性たちは憤慨して激しく声を上げ、やがて怒りに任せて我々に小石を投げつけてくるようになった。我々

¹⁹ Vicomte de Marcellus, *Souvenirs de l'Orient*, Debécourt, 1839, 2 t., t. II, p. 160.

を案内してくれたトルコ人は、それを見て大変満足そうにしていた²⁰。

ここでもマルセルスの場合と同様に、服装そのものがオリエント人の反感の原因となっている。旅行者は女奴隷たちに対して、一言も言葉を発したわけでもなく、また取り立てて目を引く行為をしたわけでもない。まさに彼女たちの敵意は、ヴァロンの身につけている服装に由来しているのである。結局のところ、女奴隷たちはヴァロンを通じて、彼個人を見ているのではなく、旅行者の服装が表象する「異教徒」というイメージを見ているのである。

オリエントにおいては、西洋の服装は時として、このように全く相反する働きをすることがある。この服装はある場合には、旅行者の安全を保証しその身を守ってくれるもするが、また他の場合には、たとえ旅行者が何もしなくとも、自動的に現地人の敵意を呼び寄せてしまうのである。そしてこれらの働きはいずれも、服装を通じて個人が匿名化され、多かれ少なかれ抽象的なイメージに還元されてしまうことによって生じているのである。ここで最後に、服装を通したオリエント人の認識という主題が文学作品の中で展開される例として、ネルヴァルが『東方旅行記』で報告しているあるエピソードを分析してみよう。このエピソードは、西洋の服装がオリエント社会で持つ価値に関して、さらに新たな光を投げかけてくれるはずである。

ネルヴァルとサン=ジャン=ダークルのパシヤの会談

黒服の意義

ベイルートに滞在中のネルヴァルは、ある時、サン=ジャン=ダークルのパシヤ[地方長官]に面会することを思い立つ。彼はベイルートの町で、あるドルーズ族の娘に恋をし、その娘と結婚することを望むのだが、娘の父親であるドルーズのシャイフが何らかの事情で投獄されていることを知るのである。娘との結婚を現実のものとするために、作家はその父親の釈放に向けて働きかけをおこなおうと決意する。すると偶然にも、このシャイフの身柄の管轄はベイルートのパシヤではなく、はるか南方の町であるサン=ジャン=ダークルのパシヤにゆだねられているという。ネルヴァルは実は、以前このパシヤ

²⁰ Alexis de Valon, « La Turquie sous Abdul-Medjid - I - Smyrne », *Revue des deux mondes*, 1^{er} mai 1844, tome VI, p. 489.

がパリを訪問している際、個人的にその知己を得たことがある。したがって面識のあるこのサン＝ジャン＝ダークルのパシヤに頼めば、シャイフの一件について取りなしてもらえるのではないだろうか。このように期待する作家は、早速ベイルートを発ち、サン＝ジャン＝ダークルへと出帆することにするのである。

サン＝ジャン＝ダークルへ向かう船上で、ネルヴァルはあるマルセイユ出身の男と知り合いになる。この男は長くトルコに住んだ経験があり、作家がパシヤと面会する際に気をつけるべき点について、いろいろと忠告を与えてくれる。この男によると、パシヤを訪問する際にとりわけ重要となるのは、作家が今着ているオリエント風の服装を捨てて、西洋人の服装を身につけていくことだという。もし作家がそのままオリエント人の服装で面会に赴けば、待合室でさんざん待たされるであろうから、その日のうちにパシヤに会うことすらできなくなってしまうだろうというのである。ネルヴァルは、現地の風習をよく知っているこのマルセイユの友人を信用することにし、サン＝ジャン＝ダークルに到着すると、早速その忠告に従って、西洋の服装に着替えてからパシヤの邸宅へと赴く。

パシヤの宮殿に着くやいなや、ネルヴァルは友人の忠告が全く正しかったことに気づく。すでにそこには、パシヤとの面会を求めて現地の人々が多数詰めかけており、オリエントの服装をしていたのでは、これらの人々とともに自分の面会の順番を延々と待つはめになったはずなのである。作家は西洋の服装で面会に来たことを喜んで、次のように言う。

中庭に訪問者たちの馬や奴隷がひしめいているのを目にして、マルセイユ人が僕の服装を変えさせたのは正解であったと思った。レヴァントの服装をしていたのでは、僕は貧相な人間にしか映らなかったであろう。黒服を着ているおかげで、全ての人の視線が僕に注がれるのだ²¹。

実際、ネルヴァルは自分の順番を待つことなく、直ちに謁見の間へ請じ入れられ、パシヤと面会することができる。マルセイユ出身の友人の助言は、全くもって正しかったのである。作家はしかし、彼を迎え入れてくれたパシヤの態度が、どこかよそよそしいのに気がつく。パシヤは、彼が期待していたほど暖かく歓迎してくれないのである。例えば、作家は確かにパシヤがパリにいた頃、フランス語を話すのを耳にしていたのだが、ここではオリエント

²¹ Nerval, éd. cit., p 577.

における公用語であるイタリア語しか話せない素振りをする。またパシヤはこの遠来の知人に対して、当地の仕来り通りにパイプとコーヒーを出してくれるだけであり、作家が内心期待しているように食事でもてなしてくれることもない。さらに作家をがっかりさせることには、パシヤは彼に対して、オリエントの儀礼的な挨拶である「キエフ[昼寝]は快適ですか？」という言葉しか語りかけてくれないのである。つまりパシヤは、ネルヴァルが期待していたように旧知の友人としてもてなしてくれるのではなく、単なる見知らぬ西洋人としてしか扱ってくれないのである。このような冷ややかなパシヤの態度に驚きもし、またがっかりもしながら、作家は訪問の目的であったドルーズのシャイフの一件も切り出すこともできずに、その邸宅を後にする。

ところがまさに辞去しようとする間際に、作家は宮殿づとめの士官から、パシヤが彼にふたりの護衛をつけるよう命令を下したと知らされる。この護衛は、作家が訪れたいところはどこでも案内するよう言いつかっているというのである。先ほどの冷淡な迎え入れ方から考えて、なぜパシヤがこのような配慮を見せてくれたのか、作家はとっさに理解することができない。その謎を解き明かしてくれるのは、さきほどのマルセイユ出身の友人である。彼が言うには、これらの護衛をつけてくれたことは、パシヤが作家を夕食に招待してくれたことを意味するのだという。ネルヴァルは、夕食に招待するのになぜこのような回りくどいことをするのかといぶかしく思いながらも、時刻になるのを待って、再びパシヤの邸宅へ赴くことにする。

二度目にパシヤの屋敷を訪れてみると、先ほど待合室を埋め尽くしていた現地人の嘆願者は全てすでに帰った後であった。作家はすぐに、謁見の間に隣接する部屋へと請じ入れられ、そこでパイプを吹かしているパシヤを目にする。作家の姿を認めるとパシヤはすぐに立ち上がって、西洋風に握手を求めながら、見事なフランス語で彼にこう語りかける。「どんな案配です？私たちの美しい町を十分に散歩してくださいましたか²²？」パシヤがこのように、朝とは全く異なる態度で自分を迎えてくれるのを目にして、作家は当惑を隠すことができない。驚く作家に対して、パシヤは彼の態度の変化の理由を、次のように説明するのである。

「ああ！失礼しました」彼は僕に言った。「今朝はパシヤとしてお迎えしたのです。待合室にいたあの連中は、私がフランギのために礼を欠いたとすれば、私を決して許さなかったことでしょうかね。コンスタンチノーブルであれば、

²² *Ibid.*, p 586.

誰でも分かってくれるのですが。しかしここは田舎ですからね²³。」

パシャが作家を迎え入れるのに、二度の異なる機会を設けたのは、待合室にいた現地人の嘆願者に対する配慮のためであったというのである。パシャによれば、最初の会談では、これらの嘆願者を考慮して、公人として作家を迎え入れざるを得なかった。今のように、作家を旧知の友人として個人的に歓迎するためには、現地の人々が帰った後でなければならなかったというのである。それではパシャにこのようなまわりくどい手間を強いることになった、現地人に対する配慮とは、一体どのようなものであったのであろう。

実はこれらの全ての原因は、作家が面会の時に着ていた黒服にあるのである。ネルヴァルにとって西洋の服装をすることは、面会の際の待ち時間を短縮するための便利な手段でしかなかった。ところが服装によって個人が認識されるオリエント社会にあっては、黒服が持つ意味は彼が考えるほど単純なものではないのである。実際、待合室にいた現地の人々にとって、この服装が指す意味は明白である。すなわちこの服装は、「フランギ」つまり「西洋人」を意味するのである。そして現地人の嘆願者にとって、この「フランギ」という資格は、前に考察したように、多かれ少なかれ抽象的なイメージとして現れてくる。黒服を身につける人は誰であれ、強大な力を持つ西洋の国々から来た人間、あるいはそのような西洋国家そのものとして認識されるのである。ネルヴァルが自分の順番を待つことなくパシャと面会することができたのは、まさにこうしたオリエント人の認識のためである。嘆願者たちは、黒服を着た作家を「西洋人」と認識し、その国家の強大さを鑑みて、自分たちの順番が抜かれることを黙認したのである。

このような認識がおこなわれている空間において、もしパシャが作家を友人として特別にもてなした場合、パシャの行為はある特殊な意味を持つことになる。作家に対する特別な配慮は、パシャの西洋国家に対するへつらいと解釈され、その異国びいきを糾弾されることにもなりかねないのである。フランスにしばらく暮らしたことがあるサン＝ジャン＝ダークルのパシャは、作家を含めたヨーロッパ人が、このような現地人の認識に対して無知であることを知っていた。また彼は同じように現地人の考え方をも理解している。パシャが作家に対して二度にわたって異なる面会の機会を設けたのは、二つの文化に通じた彼にしかできない巧みな措置であったと言える。こうして彼は、

²³ Loc. cit.

現地人に対しても作家に対しても、同じように気分を害させることなく、双方を満足させることに成功するのである。

「ジェントルマン」と「オスマンリ」

ネルヴァルのサン＝ジャン＝ダークルのパシャとの面会のエピソードは、ひとまずこのように解釈される。つまりオリエントにおいては、服装は西洋人が考えるよりもはるかに重大な意味を持つのであり、服装に関する当地の習慣を知らなかった作家は、パシャの機知によって救われなければ、待合室にいた現地の人々の怒りを買うはめになったのである。ネルヴァルが語るこのような経験は、オリエントにおける服装の意義を知らしめてくれる貴重な例のひとつなのである。ところが我々にとって驚くべきことに、このエピソードはこの後、こうした解釈を無効にしていくような展開を見せていく。そしてこのような展開こそがまさに、オリエントにおいて服装が持つ真の価値を明らかにしてくれるのである。ネルヴァルが着ていた黒服は最終的にどのような意義を持つことになるのか、パシャとの二度目の面会を通じて考察してみよう。

二度目に邸宅を訪れた際、作家はパシャから、ヨーロッパ風の親しげな歓待を受ける。最初の訪問の時に彼が見せた冷淡な態度とはうってかわり、今回はパシャは、作家と気取りなく握手を交わし、彼にフランス語で語りかけてくれる。その目を気にしなくてはならない現地人の嘆願者がいなくなった今となっては、パシャは気兼ねなく作家を、旧知の友人として待遇することができるのである。パシャのもてなし方の変化は、彼が作家に食事を振る舞ってくれることからもうかがえる。一度目の訪問では、オリエントではどんな訪問者にも決まって出されるパイプとコーヒーしか振る舞ってくれなかったことを考えれば、このパシャの申し出は、作家を友人として特別にもてなしてくれていることを示しているのである。しかもその夕食は、西洋風におこなわれるという。つまりパシャは、作家が長らく故国を離れて旅をしていることを考慮してくれているのである。作家はこのようなパシャの配慮に十分感謝を感じながらも、他方で、西洋文化がこのようにオリエントの土地にまで浸透していくことは残念だとも思う。そこで彼はパシャに対して、「ただのツーリスト」として扱われることに不平を言ってみる。それに対するパシャの返答こそ、まさしく注目に値する。パシャは「だってあなたは黒服で私

に会いに来られているではないですか²⁴！」と答えるのである。またしても「黒服」である！なぜパシャはここで、この言葉を口にするのであろうか。作家に対して二度の面会を用意したパシャは、一般のオリエント人のように服装によって個人を抽象化、匿名化する習慣から、自由であったのではなかったのだろうか。パシャのこの返答について、どのような解釈を与えればよいのであろうか。

パシャが作家に西洋風の食事を用意したのは、まさに作家が黒服で面会に赴いたからであるという。つまりパシャの頭の中では「西洋の服装」と「西洋風の食事」の間に論理的なつながりがあることになる。黒服で面会に来る人間には、誰に対しても西洋風の食事を出すべきであり、またそうすれば訪問者も喜ぶとパシャは考えるわけである。このように考えていくと、我々は先ほどおこなった考察に関してあらためて疑問符をつけざるを得ない。果たして我々が考えたように、最初の面会ではパシャは周りの目を気遣い、公人としての立場で作家を迎え入れざるを得なかったのだが、二度目の面会では、配慮すべき地元の嘆願者がもはやいなかったのも、彼を友人としてもてなすことができたという解釈することは正しいのであろうか。二度目の面会の際であっても、実はパシャは作家を、黒服が象徴する「一西洋人」としてしか見ていないのではないだろうか。結局のところ、パシャの視線と嘆願者たちの視線は、それほど性格の違うものなのであろうか。

このような問い直しは、パシャとの二度目の面会に関して、新たな解釈を生み出すことを必要とする。パシャが二度目の面会の際に作家に見せた親しげな身振り、つまり気取らない握手やフランス語による挨拶などは、実はパシャの自然な感情から出てきたものではなく、西洋人の振る舞いのある種人工的に真似たものに過ぎないのではないのではなかろうか。長年のフランスでの滞在から、パシャは、西洋人が友人を迎える際にどのように振る舞うかを知っている。その振る舞い方をパシャは作家に対して忠実に再現しているのに過ぎないのではなかろうか。そして我々はここで、ネルヴァル自身もこのような考えを共有していることを知るのである。

どんなに努力をしても、またどんなにトルコ人の好意を勝ち取ることができても、我々の生き方と彼らの生き方を直ちに融合することができるなどと考えてはならない。トルコ人がある場合に見せるヨーロッパの風習は、一種の中立地帯となっていて、そこで彼らは自分を全てさらけ出すことなく、我々を迎え入

²⁴ *Ibid.*, p 587.

れるのである。彼らは我々の言語を用いるのと同様に、我々の風習を模倣することには同意する。しかしそれはあくまで、我々と面と向かったときに限るのである。彼らは、半ば農民で半ば領主であるあのバレエの登場人物に似ている。ヨーロッパに向けてはジェントルマンの面を見せるが、アジアにとっては常に純粋なオスマンリ[オスマン帝国人]のままなのである²⁵。

結局のところ、ふたつの異なる文化に属する習慣を同時に自分のものにすることはきわめて難しい。サン=ジャン=ダークルのパシャは、フランスにしばらく暮らしたことによって西洋の習慣について知識があり、それをある程度模倣することはできる。しかしだからといって、彼が完全にヨーロッパの風習に同化していると考えてはならない。たとえ彼が「ジェントルマン」の態度を見せるとしても、それはあくまで西洋人向けに作られた、ある種人工的な振る舞いであるに過ぎず、決して作家個人を前にした、自然な感情から生まれてきたものではないのである。逆に言えば、黒服を着て彼の前に現れる人間には、誰であれパシャは同じような態度を取ることになるであろう。パシャの作家に対する視線も、詰まるところ待合室にいた現地の人々のものと同じで、彼を匿名の「一西洋人」として見ているに過ぎないのである。

エピソードの残りの顛末に関しては、手短かに見るだけで済まそう。結果から言って、ネルヴァルはこの二度目の面会の際にも、彼の訪問の目的であるドルーズのシャイフの一件への取りなしをパシャに言い出すことはできない。食事が終わると作家は、パシャが自分にオリエントの踊り子の舞踏を見せてくれるのではないかと密かに期待する。今までのいきさつから考えて、西洋人がこういった場合にするように、彼が妻を紹介してくれるなどということは望めそうにない。しかし少なくともオリエントの習慣に従って、せめてこのような楽しみぐらいは用意してくれるだろうと作家は考えるのである。ところがここでも彼の期待は裏切られる。パシャは作家を地下のビリヤード室に誘い、そこで夜中の一時まで延々とビリヤードの勝負につきあわせるのである。「最後まで僕はヨーロッパ式を忍ばねばならなかった²⁶」と作家はうめく。彼が着ていた黒服は、このように一貫してパシャのもてなし方法を決

²⁵ Loc. cit. ネルヴァルがここで言及しているバレエの登場人物とは、1841年にオペラ座で初演された、ゴーチエ他数名による合作の二幕バレエ『ジゼル』に登場する、シレジア領主アルペール侯のこと。アルペール侯は百姓娘ジゼルを誘惑するため、農民に変装する。

²⁶ Ibid., p 588.

定していくのである。作家はパシヤに花を持たせるため、できるだけビリヤードの勝負で負けてやる。作家を負かしたパシヤが上げる喜びの声は、彼の作家に対する見方を知る上で、またしても興味深い。パシヤは「フランス人が、フランス人が負けているぞ²⁷！」と快哉を叫ぶのである。パシヤはフランスに滞在していた頃、メッスの軍隊学校にいたのだが、おそらくその時期に、級友のフランス人とビリヤードで勝負して、さんざん負けたのであろう。同じフランス人である作家に対する勝利は、パシヤにとって、そのときの敗北を埋め合わせるものとなるのである。いずれにせよここでもネルヴァルは、パシヤにとって「一西洋人（フランス人）」として認識されているのである。勝負に勝って喜ぶパシヤに対して、作家は次のような言葉をかける。その内容にも着目したい。

「サン=ジャン=ダークルは我々の軍隊にとって、確かに縁起のいい場所ではありませんからね。」と僕は言った。「でもここではあなたは一人で戦ってらっしゃいますが、以前のダークルのパシヤには、英国の大砲があったのですよ²⁸。」

1799年サン=ジャン=ダークルは、ナポレオンが率いるフランス軍の攻撃を受けた。その戦闘の際、防御側のパシヤは英国人の支援を受けて、攻防二ヶ月の末、フランス軍を追い払うのに成功している。パシヤとネルヴァルのビリヤードの勝負は、このようなトルコとフランスの戦争になぞらえられるのである。パシヤから常に「フランス人」としてしか見てももらえないネルヴァルは、自分をフランス軍と比較することで、最後にはとうとう、パシヤと同じ見方で自分を眺めることに同意するのである。

結 論

オリエントを訪れる西洋人旅行者は、ヨーロッパとは異なる様々な現地の風習を目にすることになる。その中でも服装に関するオリエント人の独自の習慣は、旅行者にとって興味深いものであったことであろう。なぜならここでは、各人の服装は、その所属する民族や宗教、社会的身分や職業によって厳密に規定されているのである。もちろん西洋でも場合によっては、身につけている服装によって、その人の出身地や従事する職業などが分かることが

²⁷ Loc. cit.

²⁸ Loc. cit.

ある。しかしオリエントではその習慣がきわめて体系的に組織されており、たとえ外国人であっても、その仕組みさえ理解していれば、服装からある現地人について様々なことを知ることができるのである。おそらくこのような風習は、オリエント、より正確に言えばオスマン帝国が、多種多様な民族・宗教に属する人々によって構成されていることから生まれたものであろう。様々な出自からなる人々が、集団の中からお互いを見分けるために、その所属ごとにある決まった服装をするようになっていったのである。

このような風習が一般におこなわれている社会にあっては、旅行者も外国人であるからといって、その服装に無頓着であるわけにはいかない。ここでは服装が個人の判別のための重要な指標となっているのであり、どんな服装をするかという問題は、どのように他人から見られるかという問題と直結しているのである。またオリエントの習慣を無視したちぐはぐな服装は、それだけで現地の人々を混乱させかねない。それゆえ旅行者は、無用の誤解を避けるためにも、現地人の習慣を考慮した上で、自分が身につける服装を慎重に選ばなければならないのである。むしろ旅行者は、西洋人であるからといって必ず西洋の服装を身につけなければならないわけではない。その気になればオリエント人の服装を選んで、現地人として通していくこともできる。また西洋の服装を選んだ場合であれば、オリエント人の外国人に対する反感にさえ注意すれば、その母国が東方の国々に対して持つ威光によって、オリエントでも安全に過ごすことができる。オリエント社会の服装に関する習慣は、このような様々な利点を旅行者にもたしらしてくれるのである。

ところがこのような服装にまつわるオリエント人の習慣は、同時に、旅行者から否応なくその個人としての資格を剥奪してしまうことにもなる。現地人の服装をするにせよ、西洋の服装をするにせよ、旅行者は服装を通してある特定のグループの構成員として見なされるようになり、旅行者の個人個人の違いは希薄になっていくのである。こうしてある服装が示す、多かれ少なかれ抽象的なイメージだけが一人歩きするようになり、旅行者のアイデンティティは次第に脅かされていく。ネルヴァルが語るサン＝ジャン＝ダークルのパシャとの面会のエピソードは、まさにこの点で典型的である。作家が着ていた黒服は、作家を強制的に「西洋人」というイメージの下に現出させ、パシャが彼に対して取る態度をある程度あらかじめ決定してしまうのである。国籍や宗教といった抽象的な指標による個人の判別。これはこの時代のオリエント旅行記の中に、様々な変奏を重ねながら繰り返し現れる主題であるが、服装にまつわる問題は、それを比較的分かりやすい形で我々の前に提示して

くれるのである。

「